

島小の教育実践—授業づくり

Educational Practice at Shima—Elementary— School;
Focusing on Early Approachs to Method of Carrying Class and Learning Activity

狩野 浩二
KARINO Kouji

キーワード：授業、島小、斎藤喜博、授業づくり、へそを出す

1. 課題
2. 授業の基盤をつくる
 - 1) 学級編成
 - 2) 職場づくり
 - 3) 教材研究
3. 授業をつくる
 - 1) 授業づくり
 - 2) 日常的な授業における追究
 - 3) 集中的な学び合い
4. 授業の発展—授業を核にした学校づくり
 - 1) 専門家のアドバイス
 - 2) 父母参観日
 - 3) 学校行事の創造

1 課題

ここでいう島小とは群馬県佐波郡島村立島小学校（途中から境町と合併）のことであり、対象は斎藤喜博(1911-1981)が校長として在職した1952（昭和27）年4月から1963（昭和38）年3月までの時期である。島小は斎藤喜博校長の下で「特異な教育実践」（『大辞林』第2版、三省堂1995年）を行なった学校であり、当事者の言説の他、映画、レコード、写真集などさまざまな資（史）料を大量に残しており、また、同時代から現在においても教育実践や教育学研究に大きな影響をあたえてきているが、しかし、その教育実践の内実をめぐってはさまざまな憶測や風評によって必ずしも正確に捉えられているとは言えない状況である（1994年8月24日、日本教育学会ラウンドテーブル「斎藤喜博の授業論—島小の授業」など、『教育学研究』37頁、第62巻第1号、1995年3月、日本教育学会）。先行研究は例えば、校長であった

斎藤喜博や島小の教育実践に関しては斎藤自身の周辺にいた実践家や研究者によって評伝や人物研究がなされてきている。横須賀薫『斎藤喜博 人と仕事』国土社1997年、笠原肇『評伝斎藤喜博』一莖書房、1991年、箱石泰和『教授学への出発』一莖書房、1986年など。しかし、これまでの研究は主として斎藤喜博の言説を手がかりにしながら、そこに教育の理論を読み取るというものであったり、島小の教育実践を通して提出されてきた教育技術をめぐる定説化という視点からのものであったりした。そのため例えば、具体的な職場づくりとか、学級経営とか、地域との連携とかの内実など教育実践の事実を再構成するというものはほとんどなかったといってよい。本稿では、島小の学校資料に依拠しながら島小の教育実践の具体的な中身を再構成し、そこから島小における教育実践（学校づくり、教師教育、授業研究などの中身）の内実を明らかにし、今日の学校教育の実情に対して課題を提起する。今回はとくに斎藤赴任の1952（昭和27）年から第1回公開研究会（1955年）の頃までの島小における教育実践の初期の段階を取り上げ、島小における授業づくりの出発について光をあてる。

2 授業の基盤をつくる

1) 学級編成

島小の教師たちは、教職員全員の話し合いで学級担任を決定した。どの教師がどの学級を担当するかということについて、教職員全員の希望や教職員全体の意見が反映されるようになっていたが、しかし、斎藤赴任当初はいくつかのトラブルが古くから在職する教師と校長とのあいだに生じ

た^{*1}。後には、教職員の異動でそれは次第になくなり、最終的に自分の希望通りの学級を受け持つことができなくても教師たちが不満に思うということはほとんどなかった。どの学級をどの教師が担当するかということを学年のはじめに話しあうことで、教師たちはその年度の課題をはっきりさせ、やがてはじまる新学期に備えたと考えられる。教師たちは自分の責任で学級を受け持つという意識を持ち、学校全体として学級づくりや授業づくりをすすめようとしていたと想像できる。次の資料は昭和30(1955)年4月、斎藤赴任から4年目の年の記録である。後にまとめられた『島小物語』(1964年)の中で斎藤は次のようにいう。

「四月二日は、昭和三十年の担任を決定する日だった。馬場教務主任(茂木平八一筆者)が、それぞれの先生の希望する学級を黒板に書いている間に、みんなはのんびりと火鉢のまわりで話し合っていた。馬場さんが書くのをみながら、『斎藤さん、希望は出したが、今年はみんなそれにこだわっていないみたいね』などともいっている…

(略)…志賀さん(武田常夫一筆者)は一年希望だったが、『六年』とみんなにいわれると、『ハイ』とこたえて受けていた。内田千代さんも一年希望が二年生になったがすんなりと受けていた。分校の泉(船戸一筆者)さんは五年希望だったが、『六年』といわれてこれも気持ちよく受けた。小島(柴田一筆者)さんが結婚したので本校のほうに回ってもらったが、本校からは、すぐに井田美智子さんが分校へ回った。分校の星川(木村悦三一筆者)さんが庶務主任になったので、そのあとへ岡本みねさんがいくことになったが、岡本さんも遠くなるのにすぐ返事をした」^{*2}

1955(昭和30)年4月の記録によれば、学級担任決定の話し合いは、当時の島小では「担任決定会議」と呼ばれていた。翌年の1956(昭和31)年には本来は、休日であった4月1日に教職員が出勤し、担任決定会議が行なわれた。新年度の最初に学校づくりの鍵となる学級担任を決めておこうということが意識されていた^{*3}。今日において校務分掌を教職員の話し合いで決めるというのは、なかなか難しいことであるが、島小においては教師たちが話し合いによって決めていた。そのうえ

同じ学級を次年度において引き続いて同教師が担当する、いわゆる“持ち上がり”でおなじ学級を担当する教師が多かった。斎藤在職中の島小では、6年生の児童を卒業させた担任を含めて、次年度の学級担任を選ぶ機会が延べ101回あった。そのうち、持ち上がりで同じ学級を受け持った教師の延べ持ち上がり回数は、47回である。割合にすれば斎藤在職中の11年間で4割強である。赤坂里子は、斎藤在職中に9回の学級担任選択の機会があったが、うち7回が持ち上がりである。金子緯一郎は、同様にして8回のうち7回が持ち上がりである。斎藤着任後に赴任した教師でみれば、この割合はもっと高いものになる。ちなみに海東照子は在職期間が4年半と短いが最初に受け持った学級を卒業させ、翌年に1年生を受け持ったのであり、在職中はずっと持ち上がりであったといつてよい。このことが授業づくりや学校づくりとどのようなつながりがあるのかということについては、今後の課題としたいが、しかし、今日において授業が成立しないという事態が増加し、毎年のように学級編成をかえ、学級担任をかえるということが増えているという実態がある。ことからの検討は慎重にしなければならないが、しかし、赤坂里子や船戸咲子のようにほぼ6年間にわたり同学級を持ち上げる教師が斎藤在職中の島小には存在した^{*4}。

2) 職場づくり

斎藤喜博赴任当初の島小では、教師の人事異動はそれ以前から滞っており、封建的な空気の中で教師たちはなるべく目立った仕事をしないようにしようという意識を持っており、学校全体がどんよりとした雰囲気であった。斎藤が1952(昭和27)年の頃のこととして後に叙述した回想によれば、斎藤赴任当初は、無難に仕事をこなせばいいと感じていた教職員たちが権威主義的な地元のボスたちや同校の年輩教師たちなどによるさまざまな精神的抑圧から次第に解放され変化していった。

「この先生たちは、それまで劣等感を持ち、消極的でできるだけ仕事などもしないで、問題の起こらないようにとばかり考えていた。したがっ

て私が赴任したときも、恐れを持っているものも多かった。若い校長にがりがり引き回され、仕事をさせられてはたまらないと思っていた。だが先生たちは素直であったし、よい素質を持っていた人もたくさんいたので、私のやることをみて、ひどく喜び、生き生きとしてきたのだった」^{*5}

齋藤は、教師たちを学校の内外に存在していたさまざまな抑圧から解放し自由にした。特に細かな服務規程や慣習的な規律を排除して、実質的な、内容のある仕事に打ち込めるような雰囲気をつくった^{*6}。

「私は最初の年に思い切って教師を自由にした。村の人にばかにされ卑屈になっている先生たちに自信を持たせるために、『村長がきてもお茶も出さなくもよい』といたりした。教育委員会その他の権威的なところからくるものも拒否したりした。そして先生たちが、専門家として、村民や行政当局と対等になり、強い自分自身の仕事を持つことができるようにと骨折っていった」^{*7}

ここには抑圧から教師を解放し、実際の仕事の内容においてきびしさを追求していくことがかえって教師たちの仕事を内容のある、実質的なものにするのだという齋藤の考え方が反映していた。実際に、島小の教師たちは、こののちには心を開いてのびのびと仕事を進めるように変わっていった^{*8}。

校長である齋藤は、教師たちが授業や行事において集中した仕事をしていくにあたって、自らは、傍観者ではいなかった。むしろ積極的に教師たちに関わり、子どもに関わった。つぎにあげるのは、1952（昭和27）年頃を回想して齋藤が記録したものである。

「…その上私は、校長になってからも、突然招集のくる校長会にはほとんど出席しなかった。出張所長や校長会長の都合で、前日とかその日の朝とかに突然校長会のある通知がきたりするので、本校分校の二つを持ち、両方を往復し、両方の行事を指揮したり授業をみたりしていた私には出席できないのだった」^{*9}

今日においては、教職員の不祥事が取りざたされるたびに服務規程を厳密に運用するという方向にある。学校によっては、学習指導を充実させる

という目的から離れ、管理的な意味において学習指導の計画案を文書化させ、その提出を義務づけるなど、形式的で実質のないことがらを強制したり、管理したりしている。そうしなければ、教師は怠惰になり、仕事をしないという発想が学校教育の内部に依然として強くあるように筆者は感じている。そうしたことを排除し、子どもの学習を成立させるという意味において仕事（授業づくり）の内容の上では教職員にきびしさを求めていったのが島小の特長である。

島小では、一切の形式的なものは、排除された。授業時間数（学習指導計画）は、流動的なものであり実際の授業の進み具合に応じて臨機応変に検討していくものだった。齋藤喜博は、自らの日記にそのことを記している。1953年1月23日の記述である。このとき教務主任であった茂木平八が授業の時間数運用に関して形式的な側面から同校の教師たちを批判をしたために、職員の間でトラブルが発生した。

「昭和二十八（一九五三）年一月二十三日のこと。齋藤が職員会で提案したこと（筆者）4. 授業の時間数などは問題ではない。しかし、本質的な仕事はしなくてはならない（教務主任が授業時間数をうるさくいったため、職員との間にごたごたがあったのでこのことはいった）」^{*10}

今日でいえば、どの教材にどのくらい時間をかけて授業をするのか、どの單元には何時間配当されるかなどということが職員室で話題になるものであり、それをあらかじめ学習指導計画案として文書化しておくことが普通である。時数のやりくりが難しいとか、教科書の最後までが終わらないとかいうような教師たちの声をしばしば耳にすることがある。計画性のない仕事は、マンネリ化し、むだな繰り返しを生み出すが、しかし、形式が先に立ってしまっただけで、あらかじめ決めておいた時数だけを消化していこうとすれば、子どものとっさのつぶやきを教師が学習の課題として組織していったり、子どものもつ論理を引きだし、それを組織していきながら内容の豊かな授業展開を創造していくことは難しくなるし、子どもの事実からはなれ、教師がなにを“教えた”かだけが問題とされるような授業となる。

齋藤喜博は、子どもや学校をとりまく地域などの状況に対応させながら、柔軟に学校づくりを展開した。たとえば、気候の変化や子どもの体調などに合わせて学年歴を変更し、実質的に意味のある年間計画をつくり、それを実践化した。齋藤は、1952（昭和27）年に島小に赴任した当初から、こうした仕事に着手していた。

つぎにあげるのは、1952（昭和27）年のことを回想して齋藤が後に叙述したものである。若干の時間的経過はあるが、内容としてみれば、ほぼ同時代の記録であるといっているものである。

「夏休みは七月二十一日から八月二十四日までだったが、八月の末はそれほど暑くはないので、夏休みを八月二十日で打ちきった。そしてそこで残した四日間を、日曜に続けて五日間続く寒休みにし、二月のはじめにとるようにした。これは、二月のはじめには強い風が吹き、ほこりも立ち、風邪もはやり出すので、子どもたちの風邪を流行させない効果があった。先生たちも寒いときに休養をとることができた。また、二学期が長くなるので、二学期のうちに充実した仕事をするのができた。その上、八月二十一日は俸給日で、先生たちは授業はなくとも集まるので、実質三日間出勤すれば、二月になって四日の休みがとれるといううまいところもあった。群馬県では卒業式は三月三十日であった。しかし私は第一年目から三月二十九日に卒業式をした。三月三十日からは学年末休業になっていたもので、休業日ではなく授業日に卒業式はするのが当然だという私の主張だった。第二年目（昭和28[1953]年一筆者）は入学式も四月九日にした。四月八日から新学期が始まるので、それまではどこの学校でも入学式は四月八日にしていた。だが私は、初めて一年生にはいる子どもたちを、全校の職員や児童で、十分な準備をしてから迎え入れたいと思った。四月八日は、担任発表やら、教室の入れかえやら、清掃やらで学校はごたごたしている。そういうごたごたしたなかへ一年生を迎え入れるのではなく、そういうものを全部終わらせ、新しい体制のなかで、十分の用意をして入学式をしようとしたのだった」^{*11}

島小の教師たちは、職員室の一角にあった火鉢を囲んで、学級の様子など子どものことについて

ざくばらんに具体的な話し合いをするということを日常的に行なっていた。お茶を飲みながらその日の授業のことや教材の解釈などを彼らは話し合ったが、それへの参加は、任意のものであり、いつだれが加わってもよいし、帰るときも遠慮することはなかった^{*12}。話題はその日の授業での失敗談や日常的な悩みなどであり、教師たちが本音を思う存分に出し合う場であった。話し合いは内容的にはときには厳しいものであったが、しかし、腹を割って話しあうことでおたがいに勉強し合うという関係が成立していた。

齋藤は赴任当初の島小の様子をつぎのように伝えている。

「四月十四日には、分校の授業をみたあと、放課後火鉢のはたで話し合いをしたが、そのときの私（齋藤喜博一筆者）の批評はつぎのようなものであった。1. 全体に子どもの学習心は旺盛だが、形式的な発言が多い。それは発問が、教材の本質と子どものそれぞれの思考に即していないからだ。…（略）…3. 出月さんの言葉は概念的でお説教的だ。4. 全体に授業にむだが多い。また、子どもをもっと全面に出さなければだめだと思う。子どもが生き生きと解放されて動いていない。教師に質問されたときだけ動いている。5. 教師は、いつでも、できるだけ具体的にわかりやすい言葉で発問したり説明したりすることが大事だ。6. 一人ひとりが個性的な独自の授業を創り出すようにしてほしい」^{*13}

3) 教材研究

島小においては、教師の行なう教材研究を実質的なものにかえていく努力をしていた。そのためには、教師自身が勉強するということが必要であり、そのための条件整備を齋藤はできる限り行なおうとしていた。たとえば、『設備』の項のはじめにあげたのも、『職員の図書の実装』だった。職員自身が実践し勉強することを中心としたのだった。教育は何といても教師が勉強し、教師に豊かな高い力がなければはじまらない仕事だからである^{*14}というように施設が貧弱であっても、何より教師が勉強し、子どもが勉強するという環境を実質的につくっていった。

このことは、授業を行なうということについても徹底していた。教師にとっては、一般的には書くことが当然であるとされている“学習指導案（教案）”を島小では斎藤赴任の当初から廃止し、そのかわりに教科書への書き込みや「子供が見てわかる実践に役立つ週案にかえ」^{*15}、ノートへの授業記録づくりをすすめた。

斎藤は、島小校長として7年目であった1958（昭和33）年に刊行した自著の中で次のようにいう。

「校長や教務主任に見せるための形式的な教案は意味がないということは、私が教師になったときからの主張であった。多くの校長が教案そのものより、教案を毎日自分のところへ出させることに意味をおいていた。出さない教師がいると自分がばかにされたように思い、その教師に文句をいった。だから『学年別雑誌』かなにかに書いてある教案をそのまま写して出しても、校長はそれで満足するのであったが、私はそういうことに意味を感じなかった。私は子どもをみ、授業をみれば一切がわかるし、教案を出させること以外にいくらか校長としての仕事があったから、そういうことに、力みかえる必要もなかった」^{*16}

「教科書への書き込みは、授業案のかわりに、授業に必要なことを何でも書くことにした。そのため毎年新しい教科書を学校で買って先生たちの私物として配布した。それまでは、古い教科書を、つぎつぎと新しい担任が引きついでつかったのだが、それでは自由に気楽に書き込むことができないからだった。指導記録も、教科書への書き込みも、誰にもみせなくともよいのだから、先生たちは気楽に書くことができたわけである」^{*17}

「…（略）…教科書を利用した。今までは教科書は学校の備品であって、その年度が終わると学校へ返し、つぎの担任に渡すのだったが、こんどはその先生にやってしまい、教材研究を教科書にじかに書き込んでもらうことにした。これは私物になるのだから、安心して自分のしらべたことを欄外に書いたり、本文へ鉛筆や赤鉛筆で○印や傍線を引いたり出来た。『このところは全体の子どもにわからないだろう』とか、『このところはどの子にもわからないだろう』とか、『このところは

きっとまちがって解釈するだろう』とかいう指導上の予想点なども、それぞれの先生が、それぞれの記号で教科書にしるしをつけることにした」^{*18}

「教案を廃止したかわりに、各学級で週予定表をつくって教室へ張^{<ママ>}っておいた。これは先生にはつぎの週の指導計画となり、子どもには学習計画となるもので、担任の先生が毎週金曜日につくり土曜日に張り出すのだった。題材や学習内容や、重要点や、しらべること準備することなどの要点がかいてあるから、先生も子どもも毎日それをみて、翌週の指導計画をたてたり、学習準備をしたりするのだった」^{*19}

斎藤着任から6年目の1957（昭和32）年に本校1年担任であった児島（川嶋）環は、教室に掃除にきた6年生が週予定表をみながら授業の様子を想像したエピソードを翌年島小の教育実践記録として刊行された『未来につながる学力』の中に報告している。児島学級に掃除に来た6年生が1年生の週予定表を読みあげて、自分たちのことのようにふるまっている様子が活写されている。児島は、斎藤赴任から5年目であった1956（昭和31）年に新卒教師として着任し、教師生活2年目を迎えていた。

「…（略）…（一年生の教室を掃除にきていた六年の一筆者）子どもたちはぞうきんをさげて、自分の教室へ帰っていきましたが、操ちゃんと清子さんと年和くんの三人は、『あしたの勉強は何だろう』といいながら、教卓の後ろの壁に『こんしゅうのべんきょう』と書かれた大きな字の下にはってある週予定表のところへ集まり、肩をよせ合ってみていました。大学で理科を専攻した人らしいきちょうめんな字で、一年生にもよくわかるやさしい文章で、きちんと書きこんである予定表のなかから、三人は明日の予定をみつけて、『一時間目はこくご、でんしんばしらをじょうずによむべんきょう。二時間目はさんすう、かいものごっこ…』と、自分たちの週予定表でも読んでいる調子で読み上げました。それから、そのとなりにはってある年間予定表をだまってみあげました。この教室の一年間の計画を科目ごとに四月から三月まで月別にわりふってある大きな予定表には学習がすむごとに赤線でそれをうめていく欄がつくられ

ています」^{*20}

その後、実際の授業をとおして教師たちが勉強しあうために事前に授業の内容を話しあうという目的で授業案を書くようになった。斎藤赴任当初は、形骸化していた教案を廃止し、教師を抑圧しているもののひとつとしてそれを否定したが、しかし、実践が進むにつれて全職員で教材研究を行なうために実質的な授業案を書き、それをおたがいに検討し合うようになっていった^{*21}。1954（昭和29）年6月頃には「研究授業もこの年からは、はっきりとしたねらいや問題点を持ってするようになった…（略）…授業案もこまかく立てて、それをプリントし、みんなに自分のねらいや問題点をはっきりと提出しておいて授業をし、授業案と授業とを比較しながら点検するようになった」^{*22}と斎藤は後に叙述している。

斎藤は、形式的な教案を廃止する一方で教師たちが実践記録を書くことを奨励した。柴田梅乃は、斎藤着任以前から同校に在職した教師の一人であり、書くことの意義を「…毎日の生活を具体的に記録し、それを文章にしてみる事により、的確な表現方法を覚え、又、さまざまな会合で、問題をつかむ事が出来るようになってきていると思う。会合でも自分で苦しんでいる事、同じ立場にいる場合、どうしても発言しなくていられない気持になってしまう。それはやはり、実践からえた事だけが、私たちのつよい力であり、納得できるものである」^{*23}と1955（昭和30）年に同校の教師たちによって編集・発行された『島小研究報告』に記録した。斎藤は、1952（昭和27）年10月の記録として「記録のとり方、整理の仕方、表現の仕方を勉強してもらいたいと思ったからだ。記録がとれるということは、教師に解釈する力とか、発見する力とか、疑問を持つ力とか、感動する力とかがなければできないことである。また、そういう力が教師につけば実践も高まるだろうし、逆に実践が高まり、教師に力がつければ記録のとり方も表現の仕方も高いものになっていく」^{*24}といい、斎藤自身は、実践記録や評論などおびただしい数の文章を残した。

島小では、授業をみるということが大事にされた。授業をみているあいだは、メモなどをとらな

いで無心になって集中してみることが大事にされた。それは、子どもと教師の関係が刻一刻と変化するものであり、その場の雰囲気は、どんなにすぐれた機械をもってしてもそのすべてを記録しきれない性格をもつ動的なものであるからだ。そこで複数の教師が授業をみてそれを頭の中にやきつけるということをしてみたわけであった。

斎藤は、後にまとめられた『学校づくりの記』の中で次のようにいう。

「…（略）…わたしの学校では、授業記録をとることに力を入れている。これは、ただ授業の経過を形式的に書くのではなく、眼に見えないその教室の雰囲気や、動作や、子どもと先生の交流の仕方や、心の動きまで、文学作品のように描写しようというのだが、こういう作業をするときには、頭のフィルムにやきつけるということが正確にできないと、どうしてもうまくいかない。そしてこの場合は、やはりこのフィルムにしっかりとした思想とか理論とかがないと、自分勝手な、表面に出た現象の記述だけの記録になってしまう…（略）…授業記録をとるときにはいつでもみんなのみた、もしくは誰かのみた授業をとることにしている。このことは、授業者だけのフィルムだけではなく、みんなのフィルムを持ちより、授業者のフィルムにやきつかなかったものまで正確にとろうとするわけであり、またみんなの公認の授業の記録をとろうとする…（略）…」^{*25}

教師たちは、授業での出来事を具体的にノートに記入することで自己の実践を相対化し、自己の実践課題を明確にしていた。

今日では、授業の記録が映像や音声などを記録しておく機器の開発、普及によって、VTR記録として残されることが多くなった。そのことは是非は別にして、そうした機器に頼るあまりに授業の中での出来事をつぶさにみるということが大事にされなくなっているのではないか。記録を機械任せにしてしまえば、授業そのものを頭の中に焼き付けておく必要はなくなるが、しかし、どのような精密な機械をもってしても記録できないものはあるはずであり、そうしたものはすべて埋もれてしまう。教師が授業展開の中で子どもの論理をとっさにとらえて、それを授業展開上の課題とし

て組織したり、発展させたりしながらそれを授業の起爆剤としていくようなことが、そうしたVTR記録に依存することによって、ますます困難になってしまうのではないか。

武田常夫は、書くためには自己の認識が確かなものかどうか問われるといい、教師修行のひとつとして積極的に実践記録の執筆に取り組んだ。後に刊行した自著の中で当時を振りかえり、このノートの意義をつぎのようにいう。

「…(略)…記録とは速記して保存することではなく、具体的な事実を材料にして、自己を認識し、教師の仕事を発見するいとなみであった。書くことを通して授業を知り、子どもを知り、それに対応する教師の人間を検証するいとなみであった。そうした仕事を通して、わたしは一時間という授業の単位が、どれほどきびしく、また豊かな実体をはらんでいるものかということ、ひしひしと思うようになった。教師の力量によって、そこには無限のひらきが生まれてくる。ノート一枚をも充たせない授業もある。五十枚を費やしても余る授業もある。一見さりげなく静かに展開されているさまざまな授業のなかに、一步ふみ込んでみれば、そこにはさまざまに異なる実質が存在していることを、わたしはみずからの行為を通して確かめてきたのである」^{*26}

「…(略)…ノートを一冊ずつ持って、毎日の実践を記録することにした。一時間一時間の授業のことも、子どものけんかのことも病気のことも、自分の反省も、何でもごたごたと、そのノートに書き込むことにした。子どもが帰ってから、翌日の計画や、一人一人や全体の子どもの話すことなども書き込むことにした。これも自分だけのノートだから、どんなことを、どんなにきたなく書いてもよい」^{*27}

金子緯一郎は、1955(昭和30)年、斎藤着任から3年目に〈ノート〉の意義について‘自己の実践を対象化し、教師として腕を磨くためのものであり、表現することにより教師自身が自己を解放していけるようになる’と指摘している。この年は、金子にとっては島小着任から2年目であった。

「『なんでも、書いておくことですね。』といっ

て、しきりにメモをとられている斎藤(喜博一筆者)さんの様子に感動した。そして、まねをした。こうして、実感したことを書きながら、つぎの実践を考えることが、どんなに大切なことであるかを、私は、知った。二年間の中に、書きためた数冊のノートと、原稿用紙の束をめくることによって、細々とながらも切りひらいて来た、私の道を、たどることが出来るのである。だが、書くことは、苦しいことだ。しかし書かすにはいられない衝動にかられて書く時がたびたびある。特に、創作的なものを書く時は、短かいものでも、ヘトヘトにつかれる。だが私にとっては、書かすにはいられないのだ」^{*28}

斎藤は、1956(昭和31)年に分校4年を受け持っていた船戸咲子(資料では、「泉幸子」という仮名で書かれている)の「学級の記録」というノートを紹介し、船戸が子どもの思考や情緒の具体的な内実を読み取り、解釈し、その事実に対応しているという。この年は斎藤喜博の島小着任から5年目であり、島小の教育実践の基礎固めが終わった時期である。

「十二月一日…(略)…／・私のひとりごと／まるをつけながら、今まであまり振わなかった、美子や道子が十点をとるようになったので『よっちゃん、がんばっているね』とひとりごとをいう。すると建夫が(建夫のよさ)それをきいていて、美子のところに行って『よっちゃんがんばっているね』といている。よっちゃんはどううれしいのだ。だってほんとうにがんばっているのだもの。私にはよくわかる…(略)…／・算数まちがいの出しっこする。そのことで、『まちがいがはっきりすることは、そのことでみんなが勉強できることなのだ』ということを学習する。(斎藤注—この後にまちがいの種類が個人別に克明にかいてある)…(略)…」^{*29}

3 授業をつくる

1) 授業づくり

つぎの記録は、1955(昭和30)年と推察される時期であり、担任は、音楽の時間に同僚の教師に歌の指導を手伝ってもらっていた。その時の記録である。資料には、5年担任の金子とあり、とな

りの4年生の担任を船戸としているが、しかし、記録によれば、金子と船戸が隣り合う教室をうけもったことはないので、おそらく分校5年の井上学級での出来事である。金子は、当時30歳であり、別の学校での経験を経て島小に転任してきていた。井上は、23歳の若手教師であり、音楽の得意な彼に金子が協力を求めてきた。「井上さんのオルガンで、子どもたちは歌い出しました。その時、教室の後ろの戸があいて、船戸さんが顔を上気させて、すっとはいってきました。金子さんは、船戸さんのはいってき方のうまさに思わずうなずきました。船戸さんも、となりの四年生の教室で、音楽の授業をしていたのでした」^{*30} 船戸は、当時28歳であり、斎藤着任以前からいた教師の中では非常に柔軟に仕事を進め、斎藤のもとで力をつけてきていた教師である。このように別の学級の授業に飛び入りで授業をしたり、別の学級の授業をみたりすることはこの時期の島小においては日常的なこととなっていた。

同様に、斎藤が教室を訪ねて授業をみたり、ときには、授業に横口を出す、後に介入授業と呼ばれる授業の事中研究は、斎藤が島小に赴任して以来島小の教師たちにとっては当たり前のことになっていた。校長であっても授業をめぐる教師たちと一緒に学び合うということが島小では日常的なことであった。1952（昭和27）年に赴任してすぐ斎藤は本校1年の金井学級を訪ねている。同校が編集発行した謄写版刷りの『島小研究報告』に受け持ちの金井は、「…（略）…一年の子供達は先生方の名まえを殆んど知らない。校長先生が授業をみに来られた時も『あのおじやんまだみててやんなつちやう、はやくいけばいいんに』などと云っている。校長先生だと教えると、『ほうれ、はなかけざるの先生だ』入学式の話覚えていたのだろう。人おじせず思つたことは何でもよくしゃべる」^{*31}という。斎藤は、各教室をまわって子どもの姿を見ながら教師たちとともに授業づくりの仕事に入っていた。

授業研究会は、島小の学校づくりにとって大変重要なものであった。1952（昭和27）年斎藤喜博が島小に赴任した年度には、次のように授業研究会が行なわれた^{*32}。

9月2日 分校研究授業。木村悦三（分校1年、国語）

11月25日 本校研究授業（内容未詳）

2月7日 特別研究授業。柴田梅乃（分校5年、国語）、船戸咲子（分校2年、算数）

3月4日 特別研究授業。金井栄子（本校1年、算数）

3月5日 特別研究授業。船戸（分2、国語）、柴田梅乃（分5、国語）

ここでいう、特別という意味がどのようなものであったか定かではないが、おそらく研究的な意味合いの強い授業であったと想像できる。翌年、1953（昭和28）年には、授業における学習形態の研究が行なわれた。

後にまとめられた『島小物語』の中で斎藤は次のように記録している。

「十月二十三日には、分校の高学年（四、五、六年）授業研究会がひらかれた。これは、この年の一学期からはじめられたもので、六月に本校の低学年部、七月に分校の低学年部、九月に本校の高学年部の授業研究会が終わっていた。この日の研究授業では、とくに六年生担任の小島君代（柴田梅乃一筆者）さんのものが意義があった。小島さんの授業は国語の発表学習であり、『レオナルドの最後の晩餐』という教材だった。この時間は、十五時間予定の十時間目だったが、授業がつきつきと積み上げられ発展していくものだった。子どもたちは、一人の子どもが意見を出すと、『それについて私のちがう意見を出します』とか、『いまの解釈に、もう少し私のをつけ足します』とかいって、問題を積み上げ発展させていった。また、一人の子どもが教科書や文章や、ノートに書いた意見などを読み上げて説明したとき、よくわからなかったり、考えのきまらなかったりした他の子どもが『悪いけれど、もう一度読んでください』などといって、もう一回読んでもらってから自分の考えをまとめていた。そんなところも島小としてははじめて出てきたことだった…（略）…この日の小島さんの授業に対して先生たちの感想はつぎのようなものだった…（略）…3. 何もいわないでいるときが生きていた…（略）…4. 教科書の文章によって問題を解決していた（田中〈金子緯

一郎一筆者) … (略) … 6. どうしてああいうクラスの雰囲気ができたのか。(森田〈赤坂里子一筆者〉) 7. 特定の子どもがよく発言していたが、それが学級全体を動かすものになっていた。(岡本) 8. 発言は少なかったが、それが全体の子どもにひびいていった。(泉〈船戸咲子一筆者〉) … (略) … この日の授業で、後の『島小授業』の原型が、生き生きとした具体的なものとして、みんなの前にはっきりと出されたのだった。したがって、学校全体の先生たちが、それからは、この授業を具体的な目標にして集中して実践していくようになった… (略) …」^{*33}

斎藤喜博は、赴任した年の11月に学習形態に関する研究の必要性を島小の教師たちに話した。

「十一月二十五日(昭和27(1952)年一筆者)／本校の研究授業会でつぎのような意見を出す。／1. 個人学習、分団学習、全体学習などの、学習形態の研究をしてほしい。／2. もっと一人ひとりの子どもに考えを出させ、それを相互にぶっつけ合わせるようにすることが大事だ。／3. 『まだわかりませんか?』と一般的に問いかけるのではなく、そのときの学級全体や個人個人の、思考や、つまずきの実態をみて、それに即応して具体的につぎの問いかけをするのでなくてははいけない… (略) …」^{*34}

翌年、2月7日には、分校5年の柴田学級と分校2年の船戸学級で学習形態論をふまえた研究授業が行なわれた。『島小物語』の中で斎藤は柴田・船戸両学級の授業を記録している。

「(昭和28(1953)年一筆者)二月七日(土曜)／小島君代さん(柴田梅乃一筆者)と泉幸子さん(船戸一筆者)と三人で話し合い、二人に特別研究授業をしてもらうことにする。泉さんは算数、小島さんは国語で、予備学習、独自学習、発表学習の学習形態を追っての授業計画をたてる。この二人に先達になってもらって、学校全体の授業形態を変えていこうとしたわけである。／二月十三日(金曜)／プリントしたものを職員にくばり、『授業の形態』について発表する。基本的な教材についての授業の形態と、その順序・内容・方法とを①予備学習②独自学習③発表学習の三つにわけて説明した…」^{*35}

斎藤は2月13日に「授業の^{<ママ>}形態」ということを教師たちに話している^{*36}。斎藤は、教師が子どもの学習の状況に対応しながら授業を展開することを授業の原則として考えていた^{*37}。子どもが個別に考えたり、似たような課題をもつ子ども同志が何名かで話しあったり、学級全体が一つの課題を追究したりするような柔軟性のある学習形態論を島小の教師たちは、こののち実践的に追究したのである。

島小において実施され、島小の典型的な授業研究スタイルとなっていくのが授業の事中研究^{*38}である。授業の最中にその授業に横から口出ししたり、ときには参観者が授業者に成り代わって授業を展開させたりするというものであった。一般的に言えば、研究授業や日常的な授業の際に参観者が発言するという事は慎むべきだという雰囲気があり、今日でもそれは同様であり、よほどのことがない限り参観者は口をつぐんでいるものである。ときどき受持の教師が気になる子どもの横に腰掛けて授業全体への影響がないようにひそひそ声で子どもに話しかけアドバイスするという光景を見ることがあるが、これは事中研究ではない。

島小の実践が展開するにつれて、研究授業の最中にお互いに教師同士が学び合うようになっていった。滝沢友次は、斎藤赴任から6年目の1957(昭和32)年に島小に赴任した。その年に本校2年生を担任し、研究授業を行なった。

授業では、ものの長さを測るには単位が必要であるということをお教えることをねらいとした。子どもがいろいろな道具を使ってものの長さを測り、その結果はかる道具が違うと長さをくらべることができないことに気づくというような展開を滝沢は思い描いていた。しかし、子どもは自分の発表を終えると集中力を失い、意識を散漫にしていった。

「その時、後ろに立っていた船戸さんが、ざわついた教室の空気を刺すように、急に子どもたちに質問を浴びせました。『ねえ、ちょっと。今彰ちゃんはね。黒板消しで黒板を測ったら十二と半分だ、といったでしょう』子どもたちはびっくりしたように船戸さんの顔を見つめて、『そう』と答えました。『だけどね、彰ちゃんはどうやって測って

いましたよ』船戸さんは、こうって黒板消しを持ち、背面黒板を測定しはじめました。彰のやった方法をまねて、ジグザグに不的確に黒板消しを動かしました。『ね、みんなこれでほんとに、この長さが黒板消しで十二と半分あると思う』^{*39}

船戸に続いて斎藤は、さらに大げさにジグザグに測定しながらチョークでその後を書き込んでいき、子どもは集中を取り戻したのだった。

このように、日常的な研究と同様に研究授業は子どもの集中をつくり出す手だてについて参観する教師がときには教師役を替わったり、問いかけたりしながらすすめられるようになるのである。後の「介入授業」(授業の事中研究)につながる授業研究のひとつの方法であり、島小における教育実践の特質を知るための手がかりになるものである。

研究授業を実際に見たあとには、その授業をめぐって話し合いが行なわれた。今日の学校においても通常しばしば見られるものであるが、しかし、島小の場合はおたがいに同じ立場で学び合うということが徹底していたのであり、具体的に子どもが授業の中で示した言動や行動、行為などの事実を出し合いながらどのようにしたら子どもの集中した学習が成立するのかという観点で教師たちは話しあった。

武田常夫は、1954(昭和29)年に当時は隣町であった境小学校から斎藤をしたって島小に赴任した教師である。武田常夫は、当時を回想してつぎのようにいう。1977(昭和52)年に回想したものである。武田は、斎藤着任後3年目に島小に赴任した。

「…(略)…指導書通りにいったかどうかただ一つの目安となるような授業研究会とは次元を異にしていた。『結構な授業でした』などと月なみなことをいおうものなら、たちまち『どこが結構なのか具体的に指摘してください』と突っ込まれる。たとえかけらのようなものでもいいから具体をとらえなければならぬ。それをもたないかぎり発言にはならないのだ。しかし、どれほど七転八倒しようとも、わたしには何も見えてこない。ときたまとらえたと思えるものがあったとしても、それは先生たちのそれと比較すれば、みじめなほど常

識的かつ平板なものにしかすぎなかったのである」^{*40}

1952(昭和27)年9月、斎藤赴任の年に分校1年担任の木村が研究授業を行なった。木村は、斎藤赴任以前から在職した教師であり「全体に古くて固い」^{*41}と批評される授業を行なった。この授業の内容に対して斎藤自身が具体的に意見を述べており、授業づくりにあたっては厳しい指摘が実際に行なわれていたことがわかる。授業者の木村は、当時49歳であり、校長の斎藤より8歳年かさであった。

「九月二日(火曜)／分校の研究授業があったが、一年生の授業(木村悦三―筆者)に対する私の批評はつぎのものである。／○全体に古い授業である。／○一年生でも石板でなく、ノートに鉛筆で書かせた方がよい。／○欠点を指摘しすぎはしないか。お説教が多すぎる。指導に中心がない。／○興味的にするということは大事だが、それは、表面的な先生の話の面白さでなく、教師の話の内容と、子どもの学習内容の面白さでなくてはならない。表面的な先生の話の面白さだけでは子どももほんとうに興味を持って集中してこないし、本質的な学習は生まれてこない。／○教室のまわりに^{<ママ>}張ってある掲示物と、授業の学習活動とに少しも関連がない…(略)…」^{*42}

その後、授業者であった木村は、自己の授業を変革し、子どもがいきいきと学ぶ授業を作りあげていく。記録は、島小の教師たちによって記録され、彼らによって検討され、公刊された『未来につながる学力』に叙述されたものである。

「…一年生の木村さんの教室から、子どもたちのうれしそうにはずんだ声がにぎやかに聞こえていました…(略)…『おれは、ふくろをなげえーさおの先につけて、せみをとった』『おれは、くものすでとった』…(略)…どつと爆笑が起こる。木村さんは相好をくずし、顔を赤らめて笑っていません。教室の南の窓際に、飼育箱に入れられたせみがありました。話し合いが終わって、子どもたちはせみの観察を始めました。ニーニーぜみの鳴き声を『ニーニーだ』『ちがわい、ジィジィだ』『ミーミーだぞ』といいはっている子どもがいます…(略)…この前の研究会のときとは、打って変

わった子どもたちの顔が、教室中に動いていました」^{*43}

木村は、1954（昭和29）年に発行された島小教師たちの手になる謄写版印刷『島小研究報告第四集』「この三年間で得たもの」に実践のきびしさとその実践を通して得られる充実感を報告した。この報告書は、斎藤喜博赴任の年度に第1集がでているが、木村が書くのははじめてのことである。

「自分のからだで、じかに経験してきた、たくさんのごときは、私の体中にうずうず一ぱいもっていて、ことばや文字では何だか、こうだといって、人にぶっつけてやれる端的な表現に苦しむほどだ。ほんとうのことは、自分のからだで、苦勞したり楽しんだりして、この職域で自分の体験を積み重ねて、自分を生長させていくこと、子供たちと共に、新しく変化して生長していくことだ」^{*44}

このように内容のある研究授業によって、教師の年齢や意識によって多少の差はあるものの授業の腕を磨き、子どもの集中した学習を組織するというに教師集団の力が結束した。木村のように30年近い教職経験を持つ教師であっても、へそを出して研究授業に取り組み、厳しい指摘を受けながら教師として成長している姿は、一般的にはなかなか見いだすことの出来ないものである。

島小の教師たちは、折に触れて自己の実践的な研究成果を発表していた。校内における研究発表は、授業研究会によるものの他に赴任しての印象を発表し合う会、保護者会、宿泊研究会、公開研究会などであった^{*45}。そのほか、文書による報告は、『島小研究報告』に発表され、さらにさまざまな話し合いを経て教育実践記録として公刊されたり、民間の教育雑誌などに掲載されたりした。

つぎにあげるのは、1952（昭和27）年5月に行なわれた研究発表会の様子を伝える記録である。船戸は、斎藤赴任以前から島小に在職し、当時25歳の若手教師であり、分校の2年生を受け持った。「子どもの話し合いが学習の本すじからはずれていく」とか、学級の子どもは「人前では引っ込み思案」とか、具体的に子どもの学習の様子が報告されており、課題が明確である。島小の教師

たちは、授業の事前、事中、事後に学び合い、それを記録として書き留め^{*46}、最終的には研究発表することで自己研鑽を深めていった。後にまとめられた『島小物語』のなかで斎藤はいう。

「五月二十七日（火曜）午後二時から本校分校の研究発表会。ひとり十分ずつする。他の人のは公式的・観念的な発表だったが、泉さん（船戸一筆者）のものは面白かった。泉さんの発表はつぎのようなものだった。/○学級にいる子どものよいところ悪いところ。/よいところ一のびのびとしていて明るい/悪いところ一わがまま、言葉が粗雑、おしゃべり、人の前では引っ込み思案…（略）…○授業について。/なるべく子どもの活動を多くした授業をしていきたい。前を向いているし、みんなよい子に見えるが、テストをしてみるとわりあいにできない。それは子どもがほんとうに活動していない授業だからだと思う。子どもが自分の考えをはっきり持ち、わからないことは全体のところにも出せるような授業にしていきたい。/○教えてもらいたいこと。/1. 学習のときおしゃべりが多い。これをどうしたらなくすことができるか。/2. 子どもの話し合いが、学習の本すじからはずれていくことが多いが、どんな態度をとったらよいか。…（略）…このように先生たちに研究発表をしてもらったのは、先生たちに自分の実践をみる目を持ってもらったり、自分の実践や考えをまとめる力をもってもらいたいと思ったからだった。同じ考えで九月からはじめた父母参観日にも毎月交替で親たちの前で発表をもらった。これは、親たちにここの先生たちの力をみなおしてもらいたいというねがいを持っていた」^{*47}

島小では、新しく赴任してきた教師たちに島小の印象を聞くということを恒例として行なっていた。どんな場合にも勉強し合うということが徹底していたのであり、この会は、赴任したての新鮮な感想をもとに島小の教育実践における課題を明確にしていくというものであった。一般的にいえば、異動したばかりの一年目には率直な意見を出しにくいものであるが、島小ではそうした抑圧を取り去り、新しく赴任してきた教師たちに発言をもとめた。赴任したばかりであるからといって発言を遠慮するようなことは許されなかったし、遠

慮なく発言することでお互いに勉強し合うことになるのだということを教師たちは理解し、実践した。この会は斎藤喜博が赴任した1952（昭和27）年の翌年からつづけられた。

「五月十九日（昭和28（1953）年—筆者）には新しく転任してきた田中健一（金子緯一郎—筆者）さんと森田明子（赤坂里子—筆者）さんとに『赴任しての印象』という題で発表をしてもらった。これは、新しく赴任してきた人の新鮮な目で、島小の子どもや教師や職場についての印象を発表してもらい、島小としての反省や発見をしようというのが目的であり、このあと毎年の恒例の行事になった」^{*48}

「二人の先生は、それぞれもとい学校もちがうし、赴任してから担任した学級もちがっているの、二人が反対の見方をしているところもある。しかしどちらも、一年間やってきた（昭和27年度一年間という意味—筆者）私たちにとっては重要な意見だった。この日は、二人の発表を中心にして、みんなして意見を出し合い解釈し合ったのだが、どれも結論は出さなかった。結論は出さないので、問題をみんなの頭にあたためておき、みんなして実践したり観察したりして、学校全体の仕事を積み上げていこうとした…」^{*49}

2) 日常的な授業における追究

島小では、研究授業のように学校や学年部などで取り組む授業研究の他に、教師たちは、日常的に授業づくりに取り組んでいた。武田常夫は、1954（昭和29）年、島小に赴任した年に本校6年生を担任し、さっそくノートづくりを通して自己の教師としての課題である“教師としての固さ”に気づき、それを修正していった。教師たちは、書くことによって子どもをしっかりと見るようになり、集中した学習が成立しない原因を子どものせいにするのではなく、それをもとにしながら具体的に自己の授業を検証し、教材研究の内容や授業展開を組み立てなおすことによって教室を教師としての力量形成の場としていった。次の記録は、武田常夫が島小の謄写版刷り研究誌『島小研究報告』に書いたものである。

「ピアノやオルガンがなければ子どもに音楽が教

えられなかつた私が、そうした楽器をたよらずに、子どものなかへとびこんで、いつしよに歌うことを通して、子どもの心と溶けあうことよるこびを知るようになってから私はほとんど楽器をたよらなくなつた…（略）…それなのに、私はいままで、いつもピアノやオルガンにばかり歌わせて自分で歌うということをしなかつた。いつも楽器でごまかし、楽器に逃避していた。私と子どもとのあいだにはいつもピアノやオルガンを通してある一線が引かれていた。/『大きい声で、恥ずかしがらないで』などとピアノ台に腰をおろしている私のコトバがいかにかそそらしく子どもたちの心にひびいていたことであろう…（略）…私はピアノもオルガンもすてた。子どもたちの前で大きな声で歌つた。歌いながら、ときどき、まちがったり、調子はずれをやつて子どもたちに笑われた。楽器がなくなつた音楽の時間は無理を子どもたちに強いることができなくなつた。オルガンなら子どもたちにとても出きそうもないような高い音も平気で強いることができるが、私が歌うとなるとそうはいかなかつた。私のせまい音域ではちよつと高い音も声がでない、低すぎてもこまる…（略）…こんなことをつづけているうちに、まず男の子がよろこんだ。オズオズとしかたなしに歌つていた男の子どもたちの口が、だんだん開いてきた…（略）…」^{*50}

武田学級の貴美子という子どもは、普段から小さな声で話をする子であった。学級自治会の話し合いなどでは聞き取れないことが多く、子どもは聞き耳を立てて聞いていた。ある時、国語の時間に朗読をかって出た貴美子は、学級の仲間から、アドバイスを受けた。

「…（略）…立ち上つて読み出そうとしたとき、明江が、『貴美ちゃん、前でよみな、そうすればもつとみんなによくきこえるから。』一生懸命読んであるあいだ、みんな耳に手をあててききとろうとしていた。読み終つたとき、『貴美ちゃん声が小さすぎる。』一人がいうとみんな『そうだ。』と賛成した。その時光男が立つて『貴美ちゃんはさつき廊下の所でお手玉してたんべ。』『うん。』とうなづく貴美子。『あの時はもつと大きい声が出たんだぜ。貴美ちゃんだつてあんな大きな声ができるん

だから、自分でもつとそういうこと考えなよ。』光男の指摘は事実の指摘である。『大きい声で。』と今まで何百回いわれたことだろう。しかし貴美子の声は大きくなるまい。『大きい声とはこういうことだ。』という光男のリアルな指摘の方がどれ程貴美子にとっては分かり易いことだろう…（略）…概念論をやめて事実で話し合う子供になつてきた。子供たちは自分たちの生活を本当によく見つめれば、概念的なことをいつてはすまされなくなり、自分の現実に立つた自分の考えで話し合わなければだめだ、ということを経験してきてきたのである」^{*51}

3) 集中的な学び合い

斎藤赴任から4年目の1955（昭和30）年には、第1回目の宿泊研修会が夏休みのあいだを利用して村費職員を含めた全職員参加の下に開かれた。同年の12月には、第1回島小公開研究会が開催されている。これ以降は、夏の宿泊研修会と冬の公開研究会が教育実践のふたつの山場として島小の教師たちにとらえられるようになった。

「この年（昭和30年―筆者）の夏休みには第一回の職員の宿泊研究会がひらかれた。夏休みに入った七月二十一日から三日間、十五名の全職員と、小使いさんも加わって、谷川岳の麓の谷川温泉でひらいた…（略）…宿泊研究会の主題は、『この三年間で得たこと』というのであった。そういう主題で、私が島小へ赴任してからの三年間で、島小としてどんな考えかたをし、どんな実践をし、どんな方向に進んできたかを全職員で整理し検討し、これからの島小としての方向や課題をはっきりさせようとした…（略）…一学期のうちに全職員で全力をあげて宿泊研究会の準備をした。一人ひとりや全体が、徹底的に準備し、研究し、それを持ち寄るのでないと、せっかくの宿泊研究会も無意味なものになると考えた…（略）…先生たちは五つの分科会で分析検討しては、それを全職員のところに出し、さらに分科会で検討するということを何回もくりかえした…（略）…直接の実践面の問題としては、『低学年の図画』『高学年の図画』『演劇』『音楽』『家庭科』の問題について、四人の先生が準備して宿泊研究会のとき発表するこ

とにした。…（略）…宿泊研究会は、はっきりと時間表をつくった。しかも、発表や討論や、講義をうまく組み合わせ、一つのものがつぎへと発展していくようにくんでおいた。時間も、朝の六時から夜の十時まで続けられたが、一つの発表と討議が終わると、いままでと考えが変わってしまったりする人もいた。それで、みんなが寝てから翌日の発表原稿を修正する人なども出てきた。誰もが、あれほど準備してきたのに、三日間、つぎつぎと新しい次元へと入っていった…（略）…この宿泊研究会は、その後も毎年行なわれたが、島小にとっては、いつも大きな意味と役割とをはたしていた。すなわち、四月のうちにその年の実践目標を立て、それにそっての研究プランを立て、宿泊研究会を目標にして個人や全体で研究し実践した。そしてそこで得た経験をもとにして二学期の実践をし、この年から開かれた公開研究会という大きな山に向かってみんなして努力していったからだった」^{*52}

宿泊研究会は、その年ごとに生じた教育実践上の課題について寝食を共にしながら集中的に追究することが目的であった。第1回では、授業研究の上での課題が図画や音楽、演劇、家庭科など主として表現に関わる内容を中心として提起され、各教師たちの個別レポートをたたき台にしながら話しあわれた。翌年は、基礎学力や教育技術の問題が中心となる。これらは、公開研究会の席で課題となったものであり、日常の授業で子どもの集中した学習を組織するなかで追究されてきた課題であった。このように宿泊研修会は授業研究会や日常的な火鉢を囲んだ話し合いと同様に実質的なものが大事にされ、子どもが学習に集中したり、いきいきと学習に取り組んだりする事実が提出され、話しあわれた。

「その年（1956（昭和31）年―引用者註）の夏休みに法師温泉でひらかれた職員の第二回宿泊研究会では、『基礎学力』の問題と、『教育技術』の問題が中心テーマとして研究された。また、それらをもとにして、父母とどう結ぶべきか、そういう仕事のなかから生まれてくる子どもの姿はどうあるべきかということも検討された…（略）…国分一太郎氏の岩波新書『教師』も、そういう意味で

この会で研究された」^{*53}

秋の休みを利用して行なわれた職員旅行は、見聞を広めるというだけではなくて、教師たちが日常の教育実践に自信を持って携われるようにという工夫が施されていた^{*54}。今日では、タクシーに乗ったりグリーン車を利用したりすることはそれほど珍しいことではないが、しかし、1950(昭和25)年代において、それらはまだまだ一般的なものではなかった。特に斎藤赴任の頃の島小の教師たちは権力の前で怖じけずく卑屈さをもっていたから、それを変えるべくあえて利用し、たとえば船などで移動するときには、当時はまだまだぜいたくだと思われていた2等船室などの上等な席を積極的に利用し、教師が自己の仕事に誇りを持ち、自信を持つようにさせるために斎藤は心を砕いた。初期の職員旅行は以下の通り行なわれた。

1952(昭和27)年11月7-8日 伊豆

1953(昭和28)年10月29日-11月1日 十和田湖

「十月二十九日には、三泊四日の秋田、青森方面への職員旅行に出発した…(略)…島小の先生たちの授業は、どんどん明確なきびしいものになっていった。それにしたがって先生たちは、集団になっていったし、仕事をしている人間にだけあるユーモアも出せるようになっていった」^{*55}

1954(昭和29)年11月2-8日 九州

「…大阪港から『るり丸』の二等船客となり別府につく…」^{*56}

4 授業の発展—授業を核にした学校づくり

1) 専門家のアドバイス

斎藤赴任の頃の島小では、教師たちが物見遊山的に学校外で行なわれる研究会の場に出かけて行って勉強するというのを極力避け、教師たちが自己の実践を積むことで授業を見る力をつけるために校内での勉強を重視した^{*57}。逆にいえば、内容のある学習であれば、さまざまな研究会に参加することを奨励していた^{*58}。

斎藤喜博は、自著の中で次のようにいう。

「…(略)…だが私は、はじめのうち外部へでないことは、やはりよいことだと思った。いろいろの研究会や講習会へ出ないから、学校でじっくり

と実践する時間が出たし、そこから自分の実践と考えをはっきりと持つことができたから、後になって他の会合へ出たり、他から学校へきた人と話し合う場合にも、自分の考えと自分の実践とてらし合いながら、自分の考えや実践を太らせていくような学びとり方をすることができたし、また、他へ少しは影響をあたえることもできたのだと思った」^{*59}

『職員の研究』のうちの第三項は、他の研究会や講演会などに巡礼的に出ないことをいっている。このことは、第一年目から意識的にやったことであるが、他からは、『島小はよそへは少しも出ていかない。自分たちだけでやっている』という批判を受けた。しかし、私はそうは思わなかった。自分を持たず、自分の実践や自分の実践から出た考えを持たない人間が、いくら出歩いたところで、自分を太らすことなどできないし、他に影響を与えることもできない。ただもの知りになるだけなのだと思っていた。そういう考えから、とうぶんのあいだ、学校外へは出ないで、校内で実践をし、学習をし、自分をつくり、自分の実践をつくり出すことを強調したのだった」^{*60}

各分野の専門家を学校に招いて島小の教育実践に関する具体的なアドバイスを受けるということ初期の島小では頻繁に行なっている。1954(昭和29)年、斎藤赴任から3年目の秋には、後に神戸大学で美術の研究者として教師養成教育に携わった画家の上野省策が島小を訪ねた。島小の教師たちは、父母を交えて子どもの絵の見方について学び合った。『島小物語』の中で、斎藤は次のようにいう。

「十月の末には友人である画家の上野省策氏が郡の教育研究大会の講師として来たついでに学校に立ち寄った。その時上野氏はつぎのような感想を職員の前でいった。1. 職員室が普通の教員室らしくない。簡素で余分なものがなく、一つ一つが便利になっている。形式的でない…(略)…各級がそれぞれ個性を持っている。それぞれの先生の個性が出ている。4. 学校全体に、『個性と統合』がよくできている」^{*61}

その他、島小を訪ねた研究者や実践家、小説家、ジャーナリストなど各界の専門家は、おびた

だしい数に上る。1966（昭和41）年に金子緯一郎が中心となって編集された『島小十一年史』^{*62}によれば、8回に及んだ公開研究会に約8,000名、その他2,000名近くが学校を訪ねており、その総数は、約1万人である。島小においては学校を公開し、子どもの姿を具体的な内容として参観者や父母、地域の人たちとともに勉強するということが徹底していた。そのためには、教師たちが胸襟を開いて、へそを出して勉強するという姿勢が重要な鍵であった^{*63}。

2) 父母参観日

父母参観日は、単に保護者向けに授業を公開するというものではなかった。教師たちが日頃の研究成果を発表する場であり、保護者とともに子どもの事実をとらえ、考える場であった。一般的に言えば、参観日の授業は、滞りなく無難に過ごそうと考えるのが一般的な教師の心情ではあるが、しかし、島小においては、公開授業も日常の授業も研究授業もどの授業においても子どもが学習する姿をありのままに事実として提出し、それをもとにしながら具体的に授業について勉強し合う場所として生かされていた。斎藤赴任1年目の3学期に行なわれた父母参観日の様子を『島小物語』の中で次のように斎藤は記録している。

「二十八年の二月十日と十一日の父母参観日に私は、『島村の子どもは、気が弱く、元気がなく、いじけていて、しかも雑である』という結論を、子どもの図画や綴り方その他の具体例をあげて親たちの前に提出した。そしてその原因と対策のいくつかの例をあげ、教師と父母で共同研究をしようことにした。この提案は、その日集まった母親には素直に受け入れられた。しかし人づたえにこの話をきいた一部の有力者は、ぶつぶついい出した。『気が弱くて元気がない』というのはまだよいが、『いじけている』とか『雑だ』というのが気に入らないというのだった。それは、『自分の家の子のように、お大尽子で育ちのよい子を、貧乏人の子のように、[いじけている] だの、[雑だ] とは何事だ』という意味であった。そういう不平が、一部の人たちの心のなかに積もっていた。また『宿題は出さないほうがよい』と私がいったこ

とも、『宿題を出せば子どもは勉強するのだ』と思い込んでいたひとびとには面白くないことだった。宿題という義務的な罰則のともなうようなものをつかわないで、本質的な質の高い授業をすることによって、子どもは力がつくし、家でも自分から勉強するようになるのだということが、この人たちには経験としてないのだった。だから不満に思うのだった」^{*64}

「学校をよくし、子どもをよくするためには、授業や行事によって教師がすぐれた仕事をしなければならぬ。それとともに、その母体である地域社会全体や、家庭やおとなの一人ひとりが、学習し、自分を持ち、地域や家庭や自分を変えていくような人間になっていなければならない。そういう意味で私（斎藤一筆者）は、地域全体が学習し、前進し変革していくようにしなければならないと思った。とくに母親や青年が学習し、学校と考えを一つにしていかなければならないと思った。それで九月からは毎月一回ずつの親たちの授業参観日をつくった。一時間全校の授業をみ、そのあとその日にみた授業や子どもや学級についての具体的なものを材料にして話し合った。この場合、できるだけそれぞれの意見を率直に出し合い、意見と意見をぶつかり合わせ、考え合っていくようにした。私も自分の意見を出し、親たちの意見を否定することもした。また子どもたちの図画作品を持ちより、その批評会をしたり、私が毎回まとめて話をしたり、先生たちが交替で発表したり、会の終わりには、合唱練習をしたりしたので、集まってくる母親たちはひどく喜んだ。いままでの村は、一部の特別の階層だけが絶対的な力を持ち、他の人たちにはほとんど発言権がなかったため、公の場所で自由に発言したり、歌をうたったりするのが楽しくてならなかったわけである」^{*65}

1956（昭和31）年4月、海東学級（本校5年生）で行なわれた父母参観日の様子である。父母参観日は、1952（昭和27）年6月からはじまり、9月からは毎月一回行なわれるようになった。1月の参観日は、保護者が企画した母親との新年会を行ない、ゲームをしたり、合唱をしたりして教師や子ども、父母が懇親を深めていった。海東は

1958 (昭和33) 年秋に刊行された『島小研究報告』のなかでいう。

「きょうはお母さんに感謝するかざりつけて教室がみなぎっています。/五年生の教室は正面の黒板におかあさんが汗をながして畑をたがやしている絵が大きなもぞう紙いっぱいにかいてはってあります。そのわきの壁には、電灯の下でぬいものをしていのおかあさんの絵、北側の壁にも、子どもを背負ってせんたくしているおかあさんの絵が大きくかゝれてはってあります。これらのどの絵もみんな子どものかいた作品です。/午後一時ごろから、おかあさんたちがみえました。教室の入り口には/『おかあさん、いらっしゃい』/と、小黒板にかいておいてあります。/教室の中に入ると、東側におかあさんたちの座席があり、南と北側に子どもたちが座っています。西側の正面できょうのもよおしが演じられるのです」^{*66}

その後、子どもたちによる呼びかけや作文の朗読があり、指名された子どもと母親が歌をうたった。

「うたい終わったあと、二人は顔を見あわせてわらっているのです。このあとおかあさんと子どもと先生の話しあいがありました。おかあさんのいいぶん、子どものいいぶんをだしあうのです… (略) …子どもとおかあさんの話しあいは、ぜんぜんためらわないで進んでいったのです。子どももおかあさんも努力して発言しているのです」^{*67}

1955 (昭和30) 1月本校6年の武田学級では、保護者を迎えて授業参観が行なわれた。この授業では、子どもは授業中ほとんど口もきかず課題に集中して取り組んでいた。この授業を経験し、教師が口を挟めないような集中力をたたえた子どもたちに感動しようやく納得がいく参観日の授業が出来たと武田はいった。教師たちは、あらゆる機会をつかまえて自己の授業における子どもの姿を公開し、その姿が本質的に充実したものである場合には、それを支える授業の原則について検討し、そこから勉強し合っていた。

「午後の始まりのベルが鳴り、教室へ入ってきた子供たちは物もいわずに円グラフの問題をやりはじめた。あとから入ってくる子供たちもそれにな

らつてすぐに学習にとりかゝる。まだ母親は一人も来ていないのに教室全体はしーんとなつてしまった。… (略) …真剣な学習から発散する緊迫感が教室全体に流れ、話し声ひとつないはりつめた雰囲気の中に、子供の教師も母親もとけこんでいた。… (略) …三十分たつても四十分たつても子供たちの鉛筆の動きは少しもにぶらなかつた。私はどうしても『止めて』ということができず、とうとう五十分経つてしまつた… (略) …一時間、殆んど口もきかず、たゞ鉛筆を動かしていただけた授業。しかし私はそれでいいのだと思つた。あれだけ張りつめた子供たちの学習を、計画にこだわつて途中でたちきつてしまうことよりも、単調な授業だつたといわれても、そのまゝ続けてしまつたことに私は深い満足をおぼえるのであつた」

^{*68}

1954 (昭和29) 年の10月同じく武田学級の父母参観日であり、このときは後の懇談会で子どもが参観する父母のために掲示した小黒板のことが話題となった。武田学級の子どもが書いた小黒板には、腰掛ける席と授業科目が説明してあり、そのことばの中には儀礼的なあいさつにはないような気持が込められていると話しあつたというのである。子どもにとっては、毎月1回開催される父母参観日は自分の勉強する姿を多くの大人に見てもらふ場所であり、ひとつの表現の場として機能していたのであり、島小の教師や子どもは、公開研究会などと同じようにそこでの授業をバネにしながら力をつけていった。

「十月の父母参観日のことだつた。いつもより多く参観に来られたお母さん達子供たちが教室のうしろへならべておいた椅子にすわつたきり一度も動かない。そして子供たちの学習をいかにも楽しそうにじつとみている。いつもだと兄弟かけもちで教室を出たり入つたりするのだが今日はどうしたのだろうと思ひながら授業していた… (略) …授業が終つたからお母さん方と懇談を始めたらいきなり克守のお母さんが『先生あの黒板は先生がかいたのですかそれとも子供たちでかいたのですか。』と聞いた。そういわれてはじめて気がついた。観察台に立てかけてある小黒板には『お母さん方この席で授業を見て下さい。今日は国語で

す。』とかいて席が絵で示されている。/『こういうことを子供たちでかいておくのはとても気持ちいいですね。』とお母さんがいつた。そこへ齋藤校長も見えて『今のこういうことが本当のしつけというものでしょうね。おじぎをしなさいとか、あいさつをしなさいとか昔の修身みたいなことをいわなくても子供たちはこういう形でお母さんにあいさつしているんですよ。これは自分の家へ来たお客様へさぶとんをどうぞといつすゝめることと同じことです。そしてこの学級全体にこの黒板に書かれたような気持ちがしみこんでいる所がとてもいいですね。』といわれた^{*69}

3) 学校行事の創造

島小における学校行事は、内容のあるものだけが厳選された。たとえば、学芸会は、一部の子どもがおしろいをつけて日本舞踊をおどるというようなものであったために齋藤赴任の年に取りやめとなる^{*70}。そのかわりに、子どもの学習成果を発表し、その機会を利用しながら子どもの学力を高めるという努力がつけられた。

初期の行事は次の通りである。

1952 (昭和27) 年6月 小学芸会 (分校と本校の交流)

1952 (昭和27) 12月 小音楽会 (かつての学芸会を廃止)

1953 (昭和28) 年3月 6年生を送る会

1953 (昭和28) 年5月 1年生歓迎小運動会

1953 (昭和28) 年10月 運動会

1954 (昭和29) 年3月 卒業生を送る会 (母親の人形劇上演)

1954 (昭和29) 年4月 遠足「全校の子どもが世良田へ歩いていく。6年生は1年生の手をひいたりおぶったりして歩いていた。また目的地に着いてから合唱やフォークダンスなどをして遊んだ」^{*71}

1955 (昭和30) 5月 新入生歓迎小運動会

1955 (昭和30) 10月 運動会「はじめて野外劇が生まれる…」^{*72}

次の記録は、齋藤赴任の年に入学した子どもが5年生になったときに行なわれたものである。謄写版刷りの『島小研究報告』に担任であった海東

が記録したものである。

1956 (昭和31) 年の夏休みに5年生全員が共同研究を行ない、その学習の成果を2学期に行なわれた“夏休み研究発表会”の場で発表することになり、5年生全員が「かとはえのいない生活」の学習成果を発表した。事後の話合いでは、発表内容の良さが指摘されたが、子どもからは発表の際に5年生が使用した言葉に群馬県地方の独特な方言がまじっていて、わかりにくかったということが指摘された。

「五年生の研究発表は内容もすばらしいし、学級全体でよく話しあわれていたということでした。ところが、発表のことばに『だんべ』が多くつかってあったので、聞きづらかったというのです。さっそく学級でもことばのことが問題になりました。なぜだんべを使うとよくないんだろうというあたりまえのようなことですが、考えてみたのです。たとえば、守の発表について考えてみました。/『ぼくなんかなぜこの研究を始めたかというダンベ、なんでこの土地にはダンベ、はいやかが多いのだろう。たいじするといってもダンベ、一けんの家が一生けんめいしてもダンベ、よその家からとんでくるダンベ、かたつぱしからたいじしなければダメダンベ……』/こゝまで話す間にダンベを六回もつかっているのです。私は守の発表したまゝを黒板にかいてみんなによませたのです。ダンベの部分だけぬかして読んでごらんといいて読ませてみました。/『ダンベをぬいてしまおうとへんだなあ。』/『ことばが^{<ママ>}つづかなくなっちゃう。』/私は子どもの発言に大きくうなずいて/『つづかなくなるのは、ダンベのことばのかわり^{<ママ>}のことばをいれないと、読み^{<ママ>}ずらいわね。』^{*73}

日常的な学習成果を生かした行事が島小では創造され、行事は、日常行なっている授業と同様に子どもや教師が勉強し合う場所であった。したがって、行事は授業と密接にかかわりを持つのであり、授業づくりの成果が公開され、子どもが学習する姿を公開することが行事のもつひとつの役割であったといつてよい。

1955 (昭和30) 年、齋藤赴任から4年目の冬に第1回公開研究会が行なわれた。この会では、教師たちが子どもの姿を公開し、島小における教育

実践の課題や到達点を確認したり、話し合ったりする会として機能した。子どもにとっては、公開を通じて自己を表現し自信を深めたり、自己の学習課題を新たにしていくという意味を持つものであった。公開研究会は、これ以降齋藤が離任するまでのあいだ8回行なわれることになる。

『島小物語』の中で齋藤はいう。

「…その年(昭和30[1955]年一筆者)の十二月には二日間の公開研究会をひらいた。県内や県外から、小中学校の先生、高等学校や大学の先生、学者、画家、教育研究者、演劇人、映画社の人、母親など、三百名ほどが集まった。村の父母もたくさん見学したり手伝ったりしていた。／研究会の日程はつぎのようなものだった。／第一日(十二月九日)……会場分校／一、授業(分校一年一六年)／二、全校集会、フォークダンス／三、職員報告および討議(発表題目)／1. 職場づくり……泉(船戸一筆者)／2. 職場合唱について……森田(赤坂一筆者)／3. 地域との結びつきについて……田中(金子一筆者)／4. 島村の子どもについて……川尻／5. 「この三年間で得たこと」について……小島(柴田(栗田)一筆者)／四、夜の座談会(本校講堂)／1. 座談会／2. 婦人会の人形劇／五、島小職員の合唱／第二日(十二月十日)／一、授業(本校一年一六年)／二、野外劇、児童合唱、寸劇の発表／三、職員報告および討議／1. 図画教育について……出月／2. 音楽教育について……志賀(武田一筆者)／3. 演劇について……田中／4. 家庭科指導について……平井／四、島小創作の職員合唱」^{*74}

つづいて行なわれた第2回公開研究会では、日常的な授業づくりの中で課題となっていたテーマが検討されることになる。

「十二月にひらかれた第二回島小公開研究会は、そういうねがいをもってひらかれたので、公開研究会のテーマも『教育技術の研究』とした。また、『去年の第一回の研究会では、今までの島小の歩みや結果を全般的に発表しましたが、今年は、“教育技術”の問題に狭くしぼって、私たちの考えや実践を批判していただくことになりました』と、研究会の要項パンフレットの表紙裏にも記した…(略)…なおこのときの公開では、つぎのよ

うに五つの分科会をつくり、職員が実践を発表し、それによってみんなして討論した。／1. 教室づくり／2. 学級づくり／3. 教材の教え方(授業展開の流れをふくむ)／4. 教育技術としての教師の演技と演出／5. 子どもの思考や感情の動きのつかまえ方」^{*75}

一般的には学校公開は、研究指定を受けての成果発表の機会であったり、あるいは教員養成大学や学部の附属学校に見られるように研究的な意味のあるものがあったりする。そうした公開において、公開当日に合わせて研究誌をつくり、授業や行事の実際を参観者に見てもらうことはよくあることである。島小においては、授業が学校づくりの核になっており、初期の公開においても子どもの学習する姿を公開するというものであった。普段行なっている教育活動を公開し、それによって子どもや教師たちが島小の課題を把握したり、それを踏み台にして自信を深めていったりしたといつてよい。

島小の卒業式は、1952(昭和27)年度から本校と分校が合同で行なうようになり、翌年には、島小児童が共同作詞し、赤坂里子が作曲した「六年生を送る歌」が生まれた。齋藤赴任から3回目の卒業式で「呼びかけの中に合唱などをとり入れた新しいかたちの卒業式を」し、「これより毎年、新しく創造的な式のやり方を考えだして」^{*76}いった。

1955(昭和30)年に行われた卒業式では「卒業式もこの年はじめて呼びかけ形式のなかに、合唱などをとり入れた新しい形式のものにした。志賀(武田常夫一筆者)さん作曲の『卒業を祝う母の歌』もこのときつくられた。」^{*77}というように儀式的な行事であってもそのなかで子どもが表現活動を行い、子ども同士が交流し学び合う場であるというように日常の授業づくりの展開の中に位置づけられていた。

これらの行事の際の歌や野外劇などの創作は、島小の教師や同校の児童の手によるものであり、初期のものは1956年11月に編集、発行された『島小研究報告』第14集「年中行事と学習の脚本」に収録されている。卒業式のあとは、謝恩会がもたれたが、こうした場においても教師たちは自分の

仕事を見つめ直し、勉強し合う場所にしていった。

斎藤赴任から3年後の1954（昭和29）年度の終わりに行われた卒業謝恩会の席で新卒で赴任した杉本が意見を述べる場面があった。杉本は、しばらく前からサンドイッチの語源をめぐって校長と意見が対立し、謝恩会の席で語源に関する自分の意見を出すことで教師としての自信が持てるようになったという。そのかげには斎藤が杉本に自信をつけさせたいと願い、卒業式のあとの謝恩会の席で杉本が発言できるように促したということがあった。このように学校行事の場は、そこは授業と同様に教師たちが腕を磨いたり、自己の課題に挑戦したりする場であった。そういう場を利用して島小の教師たちは自信を持ち、自己の実践を追究していったと見てよい。武田常夫は、1958（昭和33）年に島小の教師たちによって編集、発行された『島小研究報告』の中で、当時のことを記録している。

『…（略）…私は今まで、職員会の時など、あまり発言しませんでした。しないというより、できなかったのです。それは私に自信というものがなかったのと、いいかげんなことをいうと、すぐにゴツンとたゞかれてしまうことが、こわかつたからでした。でもサンドウイツチのことだけは、私の考えが正しいのだという自信がありましたから、いつもならだまつているのですが、そのとき

だけは平気で校長先生に反対意見が出せたのです』/杉本さんが、席につくと満場われるような拍手がおこつた。こんなに自信にみちて、堂々とした杉本さんを、私（武田常夫―筆者）は今まで一度も見たことがなかつた」*78

さらに続けて武田は、卒業式後の謝恩会の様子を記録して次のようにいう。

「食事はゆつくり楽しく、という私たちの学習は謝恩会を最後として、こんなに素晴らしい感動のうちにしめくゝりをすることができた。教育という仕事は、『ゆつくり楽しく食べろ』とか『何事にも疑問をもて』などと口で説くことではなくて、教える立場の人たちがそのことがどれだけ真実に生きているか、ということにかゝっているのだと思う」*79

島小における学校行事は、その後の運動会などに見られるように日常の授業を基盤にした表現の場であった。卒業式や新入生を祝う会、父母参観日などの行事は、毎日の授業の中で勉強してきたものを発表し、子ども同士や教師たち、保護者、地域住民など参観する人たちにその姿を見てもらう機会であった。子どもにとっては、毎日の授業の中で鍛えられた認識や表現の力を試す機会であった。

（註）

- *1 斎藤喜博『島小物語』1964年、麥書房、前出 446-447頁（引用は、『斎藤喜博全集』11、1970年より。以下、頁数は全集本による）
- *2 前出413-414頁
- *3 前出444頁
- *4 船戸咲子は、1955（昭和30）年に分校6年生を受け持つが、翌年から再び1953年入学の分校児童を受け持ち、卒業させている。赤坂は、1957（昭和32）年入学の分校児童を卒業まで受け持った。
- *5 前出337頁
- *6 狩野「島小における教職員の力量形成」、『鹿兒島大学教育実践紀要』第10巻、2000年11月
- *7 斎藤『島小物語』339頁 前掲書
- *8 狩野 前出
- *9 斎藤『島小物語』357頁 前掲書
- *10 前出348頁
- *11 前出359頁
- *12 狩野 前出
- *13 斎藤『島小物語』343頁 前掲書
- *14 前出369頁
- *15 井上光正「三年間で得たこと」『島小研究報告第四集』53頁、1955年5月（『島小研究報告』〔復刻版〕第1巻、大空社1995年所収、以下、引用は同書による）

- *16 斎藤喜博『学校づくりの記』1958年、国土社、87頁（『斎藤喜博全集』11、1970年所収。以下引用は同全集より）
- *17 斎藤『島小物語』367頁 前掲書
- *18 斎藤『学校づくりの記』88頁 前掲書
- *19 斎藤 前出87-88頁
- *20 斎藤喜博編『未来につながる学力』1958年、226-227頁（『斎藤喜博全集』別巻1、1970年、国土社所収。以下引用は同全集より）
- *21 横須賀薫『授業における教師の技量』1978年、国土社、90頁
- *22 斎藤『島小物語』411頁 前掲書
- *23 柴田梅乃「三年の実践で得たこと」『島小研究報告第四集』29頁、1955年5月（註15に同じ）
- *24 斎藤『島小物語』346-347頁 前掲書
- *25 斎藤『学校づくりの記』307頁 前掲書
- *26 武田常夫『真の授業者をめざして』1990年、国土社、86頁（初出は、1971年同社刊）
- *27 斎藤『学校づくりの記』90頁 前掲書
- *28 金子緯一郎「赴任して二年間」『島小研究報告第四集』1955年5月、98頁（註15に同じ）
- *29 斎藤『学校づくりの記』92頁 前掲書
- *30 斎藤『未来につながる学力』300-301頁 前掲書
- *31 『島小研究報告』第1集、8頁（註15に同じ）
- *32 斎藤『島小物語』348-349頁 前掲書
- *33 前出388-389頁
- *34 前出347頁
- *35 前出348頁
- *36 金子緯一郎編『島小十一年史』10頁（『島小研究報告』第6巻1995年大空社所収、引用は同書によった）形態は、十一年史では、型態と表記されるが、おそらく誤植である。
- *37 箱石泰和『教授学への出発』1976年、一莖書房、151-160頁。野瀬薫「戦前期における斎藤喜博の教育実践の形成と大正新教育の影響」、日本教育学会編『教育学研究』第62巻第4号、1995年12月
- *38 横須賀薫「斎藤喜博はなぜ『介入』するか」、斎藤喜博他編『教授学研究』9、1979年、国土社、30頁
- *39 斎藤『未来につながる学力』79-80頁 前掲書
- *40 武田常夫『授業者としての成長』78頁、1977年、明治図書出版
- *41 金子『島小十一年史』8頁 前掲書
- *42 斎藤『島小物語』346頁 前掲書
- *43 斎藤『未来につながる学力』68頁 前掲書
- *44 『島小研究報告第四集』1955年5月、43頁（註15に同じ）
- *45 狩野「島小における教職員の力量形成」 前掲書
- *46 「この実践記録の第二集『ノートから』は、昭和二十八年度中に書かれた記録簿の中から抜粋したものです」『島小研究報告第二集』昭和二十九年八月五日、49頁（註15に同じ）
- *47 斎藤『島小物語』344-345頁 前掲書
- *48 前出376頁
- *49 前出379頁
- *50 武田常夫「学級づくりの記録」92-93頁、『島小研究報告』第17集、1958年8月（『島小研究報告』第4巻、1995年、大空社所収。以下、引用はこれによった）
- *51 前出34頁
- *52 斎藤『島小物語』415-417頁 前掲書
- *53 前出448頁
- *54 狩野 前掲書、また、狩野「島小における『解放』と教育」『鹿兒島大学教育学部研究紀要』第51巻、2000年
- *55 斎藤『島小物語』390頁 前掲書
- *56 金子『島小十一年史』26頁 前掲書
- *57 狩野「島小における教職員の力量形成」 前掲書
- *58 川嶋環さん談。2001年9月15日。
- *59 斎藤『学校づくりの記』102頁 前掲書
- *60 斎藤『島小物語』369頁 前掲書
- *61 斎藤『島小物語』409-410頁 前掲書
- *62 麥書房刊。現在は、1995年に大空社から復刻版がでており、本稿ではそれを資料として使用した。
- *63 狩野「島小における『解放』と教育」 前掲書
- *64 斎藤『島小物語』355頁 前掲書
- *65 前出350頁
- *66 海東照子「どどめジャムの子の学級づくり」23頁、『島小研究報告』第18集1958年11月（註50に同じ、引用も以

下同様)

- *67 前出 25頁
- *68 武田常夫「学級づくりの記録」77-78頁 前掲書
- *69 前出 34-35頁
- *70 斎藤『学校づくりの記』78頁 前掲書
- *71 金子編『島小十一年史』25頁 前掲書
- *72 前出 34頁
- *73 海東照子「どどめジャムの子の学級づくり」21頁 前掲書
- *74 斎藤『島小物語』418-420頁
- *75 前出448-450頁
- *76 金子編『島小十一年史』28頁 前掲書
- *77 斎藤『島小物語』411頁 前掲書
- *78 武田常夫「学級づくりの記録」72-73頁 前掲書
- *79 前出73頁

(附記) 本稿は、2001（平成13）年9月30日に岡山大学を会場として開催された日本教育方法学会37において、自由研究13-⑤として口頭で報告した「島小の教育実践」を改稿したものの一部である。当日は、参加した会員からさまざまに示唆に富むご意見を賜った。本稿の執筆に当たっては、島小や境小の子どもや教師を撮影した写真家の川島浩氏、元島小教師である川嶋環氏より当時の状況をお聞きする機会に恵まれた。宮城教育大学学長の横須賀薫氏からは研究上のアドバイスをさまざまに賜った。記して感謝申し上げます。